

類の基準方法や時代観の決定に関して理解しづらい面がある。

- (8) 拙論「タイ発見の中国陶磁について」『物質文化』1980年。
- (9) 『沖繩・石垣島ヤマバレー遺跡発掘調査概報』青山学院大学 1977年。
- (10) 『郷土』11号沖繩大学によれば、砂川元島遺跡や宮国元島遺跡で天目碗片が採集されている。筆者もかつて友利元島で天目碗片を一点発見した。また同じ宮古島の上の頂（ウィヌツズ）遺跡の発掘品中に天目釉の茶入片を見出すこともあった。これらの遺跡は、ほとんど明代中期（15世紀中葉）以降の青磁類を多く伴う遺跡である。
- (11) 日本陶磁史上に於ても、天目碗が茶陶として確固たる価値感を与えられたのは、茶道の確立し始める15世紀代であり、これ以降の文献、遺跡に天目碗は数多く現われる。しかし、天目碗イコール宋代とする考え方が強く、明代の天目碗とする具体例は乏しい様に思う。こうしたこととも関連させて考えると非常に興味ある問題となろう。

Tab. 5 名蔵シタダル遺跡採集陶磁器一覧表 ※1980年4月30日現在

青磁	碗	1,512	口縁 48	A. 無文、外ワシ	5			
				B. 無文、直立もしくは内ワシ	5			
C. 1~3条の沈線	7							
D. 整った雷文	1							
E. 崩れたヘラ彫り雷文	15							
F. 蓮弁文	0							
G. 線彫り蓮弁文	0							
H. やや退化した線彫り蓮弁文	10							
I. 最も退化した線彫り蓮弁文	0							
J. 立体感を残した蓮弁文	5							
K. その他・不明	0							
磁		1,361	底部	(1) 無文	886			
				(2) 見込無釉	16			
				(3) 花文スタンプ	209			
				(4) その他 48	イ. 文字	32		
					ロ. 双魚文	3		
			ハ. 万字状文		13			
			(5) 不明	202				
				胴部	103			
			大皿	29	口縁	10	A. 円形	10
							B. 稜形もしくは波形	0
底部	19							
	胴部	0						
小皿	24	口縁	24	A. 円形	13			
				B. 稜形もしくは波形	11			
		底部	0					
	胴部	0						
鉢	22	口縁	8					
		底部	14					

Ⅰ 白 磁 206	碗 3	口縁 1	A. やや外ワシ	0
			B. 直立もしくは内ワシ	1
		底部 2	(1) 無文	2
		(2) 蛇ノ目	0	
		(3) 花文	0	
	胴部	0		
小皿 203	口縁 4	割高台	162	
	底部 199			
	胴部 0			
Ⅱ 南 蛮 524	壺・類 524	口縁 27	A. 玉縁口縁	1
			B. 肥厚口縁	22
			C. 逆L字形口縁	4
			D. ラッパ状口縁	0
			E. その他	0
底部 72				
胴部 425				
Ⅳ. その他 染付 19	碗 19	口縁 0	・近世印版手を除外。	
		底部 24	・嘉靖タイプのもののみ。	
		胴部 1	・見込文様は折枝梅花文と捻り 菊花文多し。	

### 第3節 鉄製品・石器・石製品・その他

#### (1) 鉄製品

鉄製品としては刀子がG-5グリッド第Ⅱ層より出土しており、他に表採資料として刀子、釘がある。石垣島において刀子が出土しているのは平得仲本御嶽遺跡<sup>(1)</sup>、カンドウ原遺跡<sup>(2)</sup>、ヤマバレー遺跡<sup>(3)</sup>であるが、G-5グリッド出土の刀子 (Fig. 13-1, PL. 18(1)) はヤマバレー遺跡第2地点出土のものにやや類似し、表採の刀子 (Fig. 13-2) は大形で他に例を見ない。また、釘もフルスト原遺跡<sup>(4)</sup>、ヤマバレー遺跡で、出土しているが、本遺跡の表採の釘 (Fig. 13-3, PL. 18(1)) はこれより大きく、確実に遺跡にともなうのかは断定できない。このほか、鉄滓と鉄鍋の破片と思われる板状の鉄片が出土しているが、鉄鍋の類例は山原貝塚に見られる。<sup>(5)</sup>

#### (2) 石器・石製品

砥石がI-5グリッド第Ⅱ層及びJ-5グリッド第Ⅱ層から出土している。(Fig. 15-1・2, PL. 18(2))。これらはいずれも砂岩の扁平なもので、金属製の利器を研いだと推定される使用痕を残している。砥石は山原貝塚、ヤマバレー遺跡<sup>(6)</sup>で出土している。とくに、ヤマバレー遺跡のものは金属製の利器の刃部を立てて研いだと見られる使用痕があり、Fig. 15-3, PL. 18(2) にあげた石製品 (J-5グリッド第Ⅱ層出土) も砂岩質の石に溝状の使用痕が見られるところから、あるいはこれも砥石として使用されたものかもしれない。また、Fig.

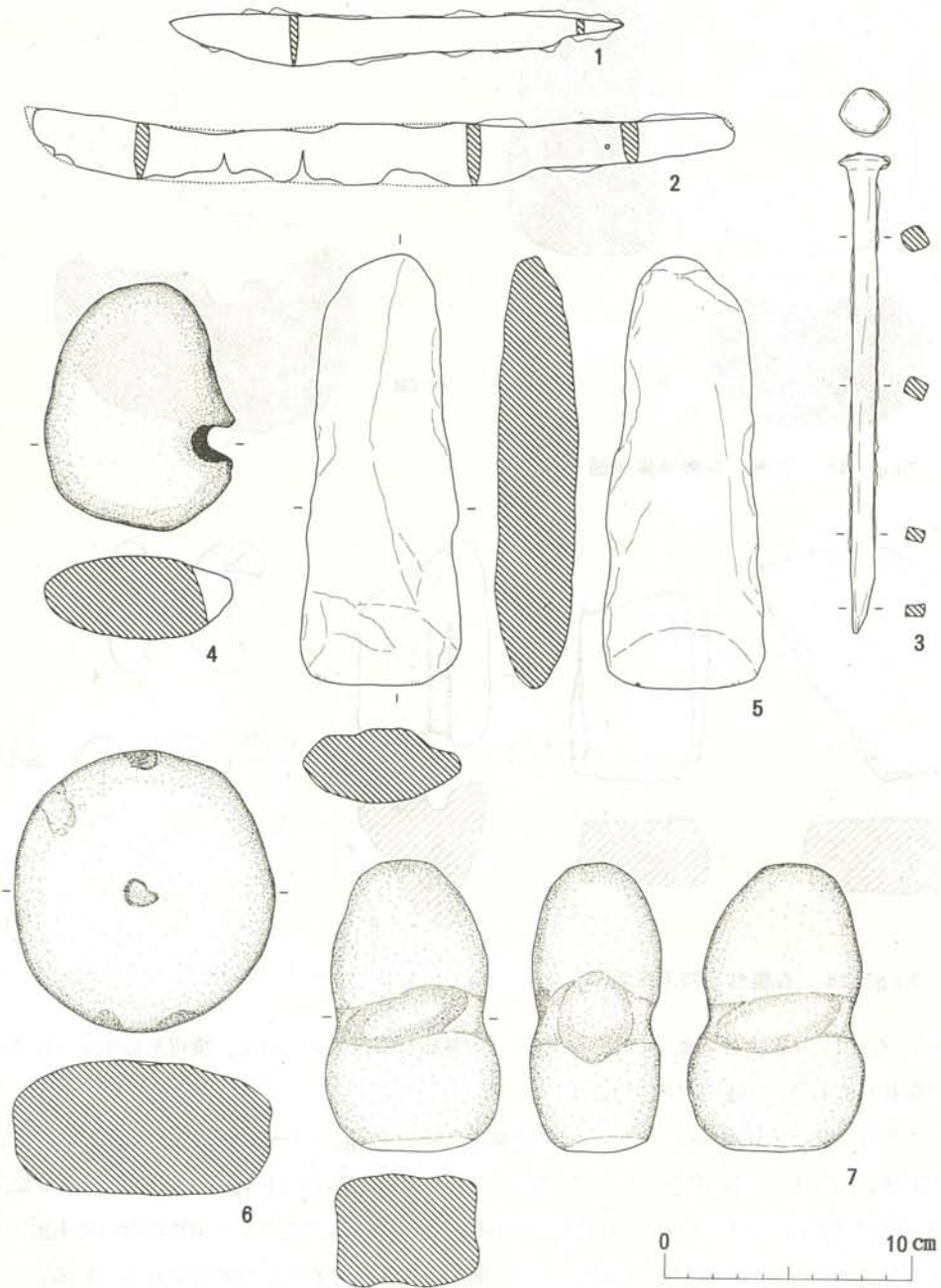


Fig. 13 鉄製品・石器実測図

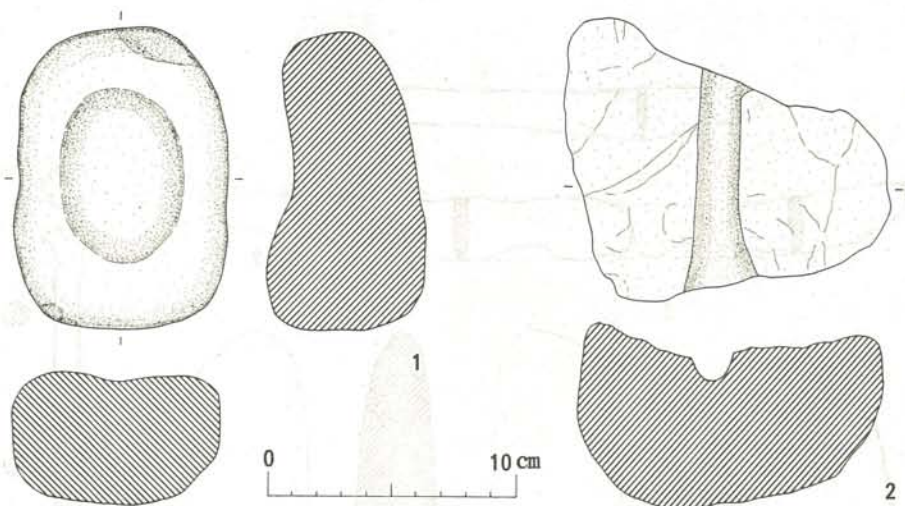


Fig. 14 石器・石製品実測図

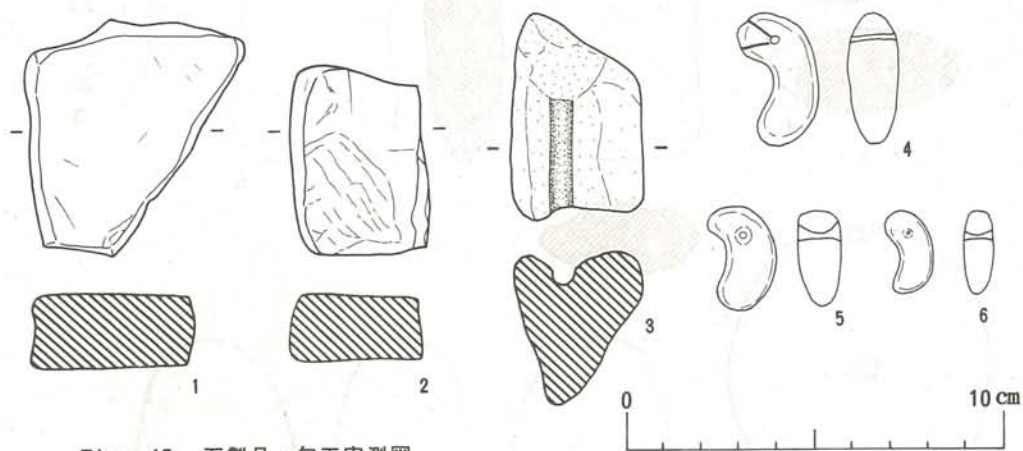


Fig. 15 石製品・勾玉実測図

13-4、PL. 18(2)の石製品はK-5グリッド混砂貝層出土のもので、楕円形のサンゴ片の縁に穿孔しており、用途は不明である。

このほかに、表採資料として両刃の局部磨製石斧（Fig. 13-5、PL. 19(1)）、磨石（Fig. 13-6、PL. 19(2)）、敲石（Fig. 13-7、PL. 19(1)）、凹石（Fig. 14-1、PL. 19(2)）、鞆の羽口（Fig. 14-2、PL. 19(3)）がある。鞆の羽口はヤマバレー遺跡においても出土しており、本貝塚にもヤマバレー遺跡と同様、鍛冶工房跡が存在した可能性を示している。

八重山における鍛冶の技術の導入は伝承では石垣島大浜村崎原御嶽の由来で、ヒルマクイ、コウチタマガネの兄弟が薩摩の坊之津へ行ってふいごを持ち帰ったとされ、また、竹富島の西塘が大永4年（1524）に竹富大首里大屋子に任ぜられ、蔵元の隣りに鍛冶屋を設けて農具をつくり、農業を奨励したという。考古学上では、山原貝塚（鉄鍋等）、フルスト原遺跡（釘）

平得仲本御嶽遺跡(刀子)<sup>(9)</sup>、カンドウ原遺跡(刀子・ヘラ・手斧・斧・鎌・ハサミ・矛等)<sup>(10)</sup>、ヤマバレー遺跡(刀子・釘・釣針)で各々鉄製品が出土しており、八重山考古学の編年上、第Ⅲ期の遺跡には鉄製品がともなっている。また、文献の上からも、15世紀末の済州島民の漂流記<sup>(11)</sup>において与那国島の頃に「鉄あり。而して耒耜を造らず。小鋤を用いて田を剔り、草を去けて、もって粟を種う。」と見え、鉄器を使用していたことがわかる<sup>(12)</sup>。このように、伝承、考古資料、文献資料を重ね合わせることによって、当時、鉄器が製作、使用されていたことは事実であり、その技術は日本本土からもたらされた可能性の高いことが知られる。そして、ヤマバレー遺跡において鍛冶工房跡が検出され、また、仲筋貝塚においても鞆の羽口が表採され、鍛冶の存在をうかがわせることは、その時代の鉄器の製作が集落内で行なわれていた可能性を考えさせる。こうした鉄器の製作のありかたが各集落において行なわれたものであったのか、あるいはそれに従事する専門集団が存在したのかは、極めて重要な問題であり、この問題は当時の社会構造、すなわちオヤケ赤蜂の乱(1500年)前の八重山における権力の発生と関連づけて考えられなければならない。

また、本貝塚でも局部磨製石斧・磨石・敲石・凹石が表採されているように、当時はいわゆる金石併用期であり、石器に対する依存度もある程度高かった点も今後考慮されるべきであろう。

### (3) 勾玉、古銭

そのほかに、表採資料として勾玉(Fig. 15-4~6, PL. 19(4))、古銭がある。勾玉は平得仲本御嶽遺跡<sup>(13)</sup>、カンドウ原遺跡<sup>(14)</sup>においても出土しているが、とくに丁字頭を有するもの(Fig. 15-4)は他に例を見ない。また、古銭は成平元宝(998年初鑄)、元符通宝(1098年初鑄)、開元通宝(621年初鑄)である。石垣島における古銭の出土は、山原貝塚(景祐元宝)<sup>(15)</sup>、カンドウ原遺跡において認められる。

なお、骨製の尖頭器も出土しているが、これについては牛沢百合子氏の記述(第Ⅲ章、第4節(2))を参照されたい。

(谷川 章雄)

### 註

- (1) 当間嗣一他『平得仲本御嶽遺跡発掘報告』 沖縄県教育委員会 1976年。
- (2) 知念勇他『カンドウ原遺跡発掘調査報告』 石垣市教育委員会 1977年。  
石橋新次他『カンドウ原遺跡緊急発掘調査ニュース(1977年度)』 沖縄県教育委員会文化課 1978年。
- (3) 三上次男他『ヤマバレー遺跡発掘調査概報』 ヤマバレー遺跡調査団 1977年。「沖縄・石垣島ヤマバレー遺跡第2次調査概報」『青山史学』6、1980年。
- (4) 当間嗣一他『フルスト原遺跡』 石垣市教育委員会 1977年。

- (5) 滝口宏他『沖繩八重山』 1960年。  
 (6) 註(5)に同じ。  
 (7) 註(3)に同じ。  
 (8) 註(4)に同じ。  
 (9) 註(1)に同じ。  
 (10) 註(2)に同じ。  
 (11) 註(5)に同じ。  
 (12) 『成宗大王実録』巻105、10年己亥六月条。  
 (13) 註(1)に同じ。

Tab. 6 鉄製品・石器・石製品・勾玉観察表

器種	実測図番号	図版番号	出土地点	特徴
刀子	Fig. 13-1	PL. 18(1)	G-5 第Ⅱ層	長さ18.3cm、幅2cm、厚さ0.3cm、重量50g。
刀子	Fig. 13-2	—	表採	現存長28.4cm、幅2.5cm、厚さ0.55cm。重量120g。
釘	Fig. 13-3	PL. 18(1)	表採	長さ19.4cm、皿部幅1.8cm、幹部幅0.9cm、皿部厚さ0.4cm。重量115g。
砥石	Fig. 15-1	PL. 18(2)	I-5 第Ⅱ層	長さ6.2cm、幅1.9~5.7cm、厚さ1.9cm。重量93g。砂岩。一面に金属製の利器を研いだ使用痕がある。
砥石	Fig. 15-2	PL. 18(2)	J-5 第Ⅱ層	長さ5cm、幅3.6cm、厚さ1.8cm。重量54g。砂岩。両面に金属製の利器を研いだ使用痕がある。
砥石?	Fig. 15-3	PL. 18(2)	G-5 第Ⅱ層	長さ5.5cm、幅3.5cm、厚さ4.4cm。重量72g。砂岩。溝状の使用痕がある。
有孔石製品	Fig. 13-4	PL. 18(2)	K-5 混砂貝層	長径10cm、短径7.6cm、厚さ3.3cm。重量182g。楕円形のサンゴ片の縁に穿孔している。
石斧	Fig. 13-5	PL. 19(1)	表採	長さ17.4cm、幅6.4cm、厚さ3cm。重量518g。緑色片岩。両刃で刃部を研磨しているが、刃はつぶれ磨減が著しい。
磨石	Fig. 13-6	PL. 19(2)	表採	長径11.2cm、短径10.6cm、厚さ5.4cm。重量880g。砂岩。両面は研磨され、側面に敲打痕がある。また、両面の中央に敲打痕がある。
敲石	Fig. 13-7	PL. 19(1)	表採	長さ11.7cm、幅7cm、厚さ4.6cm。重量646g。玲岩。端部に敲打痕がある。
凹石	Fig. 14-1	PL. 19(2)	表採	長径18.2cm、短径8.5cm、厚さ5.4cm。重量900g。花崗岩。
轡の羽口	Fig. 14-2	PL. 19(3)	表採	径12.6cm。重量900g。砂岩。熱を受けて赤味を帯びている。
勾玉	Fig. 15-4	PL. 19(4)	表採	長さ3.5cm、厚さ0.8cm、孔の径0.1~0.2cm。丁字頭をもつ。
勾玉	Fig. 15-5	PL. 19(4)	表採	長さ2.7cm、厚さ1.1cm、孔の径0.1~0.4cm。
勾玉	Fig. 15-6	PL. 19(4)	表採	長さ2.2cm、厚さ0.8cm、孔の径0.5~0.2cm。